

登場人物

長女／女1／大尉／老婆1

次女／女2／助産婦／老婆2

三女／女3／妊婦／老婆3

弟／無名／兵士

ピクニックは青空と決まっている。  
ビールとおにぎり。

そして笑い声。

あっはっは。

あっはっは。

あっはっは。

女たちが笑う。

これがピクニック。

真白な布1枚、ふわりと地面に置いた。

ほほ笑みながらバスケットを持つ。

優雅に座って食べ物を並べる。

優雅に、素敵に。

そうして追加の情報がひとつ。

女たちの頭の上には、

無数の砲弾が飛び交っている。

女たち  
あっはっは。

ドカン。

バキユン。

女たち  
あっはっは。

ドカンバキユン。

女たち  
あっはっは。

ドカン。

笑うことをやめて、

空気を切り裂く音を聞く。

ヒューーーーーー

女たちの視線はその音を追いかけていく。

ヒューーーーーー

ドッカン。

遙か向こうの大地が赤く染まった。

音の行く先の果てを見届けて。

視線をビールとおにぎりに戻して。

女たち あっはっは。

そこへ防護服を着た無名の誰かがやってくる。

無名 何やってんですか!?

女1 ご覧のとおり。

女2 ピクニックですわ。

無名 こんなところで!?

女3 え、ピクニック。

女2 さどうぞどうぞ。

無名 何が!?

女3 遠慮なさらず。

女1 ビールはお嫌い?

女2 ならお紅茶いかが。

女3 あら、お水がない。向こうの小川で汲んでくるわ。

無名 わあああああ! こころへの川の水飲むなんて自殺行為でしょう!

女1 あら、紅茶はお嫌いみたいよ。

無名 ではなくて、

女2 なら珈琲をおススメして、

無名 おかしいでしょうこれは!

女3 紅茶か珈琲どちらがよろしいか聞くのがおかしいと?

無名 いえ、でなく、

女1 普通のことよね。

女2 ねえ。

女3 ね。

無名 普通じゃないでしょう!

女3 普通って、何?

女1 紅茶か珈琲どちらがいいか選べるってことよ。

女2 素敵ね。

長女 素敵よ。選べるという普通が一番、

女3 一番、何?

女1 普通がなによりも一番豊かだってことよ。

女3 豊かって、何?

女1 サンドイッチかおにぎりか、選べるってこと。

女2 うどんかパスタか選べるってことよね?

女3 携帯会社を選べるってことでもいいの?

女1 いい喻え。最近じゃ制服をスカートかズボンどちらか選べるんだもの。

女3 じゃ新薬かジェネリックか選べるってことでもいいのね。

女2 そうそう。入院治療か在宅治療か選べるってことでもいいのよ。

女1 ええ、それって普通で当たり前でもとても豊かよ。

女3 結婚式のスタイルを選べるってことね。

女1 夫婦別姓を選べるってことよ。

女2 職業を選べるってことね。

女1 選べる立場にあるならね。

女3 避妊するかしないか女のほうを選べるってことね。

女1 あらいいこと言う。

女2 埋葬方法さえも選べるってことよ。

女1 それから宗教も選べるってこと。

女2 亡命先も選べるのかしら。

女1 選べるわ。国籍でさえももうね。

女3 そろそろ人種も選べるかな？

女1 遺伝子操作のやりようによつては。

女2 じゃあ寿命でさえも選べるような気がするわ。

無名 あの。

女1 選べるってなんて素敵。

女2 素敵ね。

女3 素敵だわ。

女1 それって、選ばなかったほうを拒否したってことだもの。

女2 選択権を持つてことは拒否権も同時に持つてることなのね。

女3 でも両方選ぶつてことも選択肢にはあるでしょ？

女1 あらヨクバリさんの末っ子的意見。

3人 あっはっは。

女たちは無名を見た。

女1 だから私たちがどこでピクニックしようが、選んでいいってこと。選べないのは悲劇じゃないかしら。

無名 だけど。

ヒュウン、ドン。

無名 わざわざ。

ヒュウン、ドン。

無名 なにもわざわざこんなところ。

ヒュウン、ドン。

無名 こんな、

ヒュウン、ドン。

無名 こんな戦場境界ラインギリギリで……

ヒュウウウウウン……

花火を眺めるように、

誰もが口を開けて空を見上げつつ。

女1 いつものことよ。お気になさらず。で？ 紅茶になさいます？ それとも、コー……

誰もが、

ゆつくりと、空を見上げた。

何かの軌道を見つめるように。

女1 ヒーーーーー……

ドン。

闇の中で青白い光が見える。

それは大画面モニタ。

ぴ。

小さな赤い点がひとつ、点滅。

大尉 はあ！？ 今なんつった？

兵士 はい。大尉殿。今自分が言ったことを復唱いたしますと、小1時間ほどお時間がかかりますがそれでも一言一句復唱したほうがよろしいでしょうかの御判断を仰ぎたいと、

5

大尉 編集、編集しろ！ 巻いてもう一度。

兵士 はい。大尉殿。さきほど、アジア区域戦場境界ライン上にて出現。

大尉 また出たか……

兵士 はい。

大尉 やはりピクニックしていたか。

兵士 はい。ご機嫌に。

大尉 現状報告！

大画面には焼野原。

兵士 吹っ飛びました。

大尉 またか。

兵士 戦場境界ラインギリギリですの。

大尉 レベル8の危険区域に行くほうがバカだ。

兵士 自己責任は聞き飽きました。

大尉 こっちもだ。

兵士 大尉殿。

大尉 ウザい！

なぜかわけもなく殴られる兵士。

兵士 ありがとうございます。

なぜか感謝する兵士。

大尉 ……幽霊じゃ、ないよね？

兵士は固まる。

兵士 は？

大尉 幽霊じゃないよねえ？

兵士 大尉殿、

大尉 え、なに。

兵士 いえ、大尉殿が実態のないものを恐れるとは思いませんでしたもので、

大尉 だって出現しまくりじゃん。このまえはこっちの戦場境界ラインに現れて、今度はそっちの戦場境界ラインで、そんでもってまた別の戦場境界ラインにもいるし、

兵士 大尉殿、

大尉 いったったか同時に出現した時もあったし、ミッキーマウスだって同じ時間に出現しないようにしてるのになんで、

兵士 全部吹っ飛んでます。

大尉 だから幽霊じゃないのンってビビってんだろうよ！

兵士 もっとおそろしかもんです、大尉殿。

大尉 お前ハカタ生まれ？

兵士 すみません、思わずクニの言葉が、

大尉 標準、標準装備！

兵士 はい！ もっと恐ろしいものです、大尉殿。

大尉 恐ろしい、とは？ 怨念よりも？ 思念ってすごい怖いんだよ。思いが凝り固まって見えるんだから。あ、生霊って知ってる？ この前ちよっと手出した二等兵女子がもうかなり怖くて家のドアの前で待ってた。勘弁してよおって思ってたら細い指が首にまわりついて悲鳴あげて気絶したら朝になってたよ。恐ろしいよ恐ろしい。紫式部はスゴイね。もう遙か昔から女の怨念がこの世で一番恐ろしいって分かってたんだから。

兵士 実物ですよ、大尉殿。

大尉 え。

兵士 人間そのものです。大尉殿。

大尉 え？

兵士 大尉の首を絞めたのはちよっと手を出した二等兵女子その人、生身だろうし、戦場境界ラインに出没するのも、毎回生身そのものです。

大尉 悪かった。二等兵女子の話は今のところ外してくれ。

兵士 はい。

大尉 生身とは？

兵士 出現する彼女たちは、いつも新しい彼女たちです。

大尉 あたら、しい、三人姉妹、で、あると？

兵士 お言葉ですが、

大尉 なんだ。

兵士 三人姉妹とは正確ではありません。遺体回収後のDNA鑑定によれば彼女たちは赤の他人です。

大尉 分かっている。こつちでそう呼んでるだけだ。

兵士 は。失礼しました。

大尉 新しいの意味を教えろ。

兵士 はい。全くの別人たちということです。毎回新しい女三人が戦場境界ラインに登場して飛び交う砲弾の最中にピクニックで戯れ笑い飽きるほど喋り倒して吹っ飛ばされ、また別の、新しい彼女たちがふらりと登場して、大尉 雨あられのように飛び交う砲弾の中、ピクニックしようかって女たちが世界中にいるってことか？

兵士 そのようで。

大尉 マジか。

兵士 遺体はきちんと回収しておりますから。千切れ飛んだ細部まで探して、間違いありません。

大尉 おかしくね？

兵士 え。

大尉 そんなの、おかしくね？ 繋がってるんじゃないの、SNSとかで。

兵士 この誤爆については全て情報は伏せられているはずです。

大尉 だよね。

兵士 しかし、

大尉 漏れてんじゃないの。いつだって情報は鍵かけてもすぐに誰かに開けられるものだし、内通者もいるかもしれない、

兵士 しかし民間レベルにまで漏れることは断じて、

大尉 ていうかさ。

兵士 はい。

大尉 漏れていて欲しいんだけど。

兵士 え。

大尉 情報ダダ漏れでさ。

兵士 はあ。

大尉 みんなで阻止しようとかタッグとか組んでさ。相談してさ。協力してさ。ずっと前にほら、人間の鎖とか言ってたみたいにさ、今度はアタシら行くね、とか言い合ってさ。

兵士 は、

大尉 そのほうが、納得できる。

兵士 はい……

大尉 漏れてなきやさ、大いに情報漏れてくれてなきや、これ、

大画面から火花。

砲弾が飛び交うシーンが見える。

空爆。

真夜中のカーニバルのようにも見える。

大尉 世界中の女たちが同じこと考えてるってさ、

飛んで行く砲弾が、やけに美しい。

大尉 すんごく恐ろしいじゃんよ……

び。

大画面に、もうひとつ赤い点が点滅。

兵士 報告。

大尉 またか。

び。

兵士 報告。

大尉 また？

び。

兵士 報告。

び。

び。

び。

兵士 ほう、こ、く……

び。

び。

び。

び。

び。

び。び。び。び。び。び。び。び。び。

赤い点が、いつしか大画面を覆って、

真っ赤に染まる。

地を揺るがすような、イキミが聞こえる。

真っ赤に染まった画面の向こう側で、

妊婦がひとり、イキんでいる。

妊婦 ぬおあああああああ！

傍らに助産婦がいる。

助産婦 はい、吸って。

妊婦 ぬおああああああのおおお！





妊婦は、ゆつくりとお包みに手を伸ばす。

妊婦 ……かわいい……かわいい……赤ちゃん……

お包みをそつと抱きかかえる。

妊婦 かわいい……かわいい……私の………

妊婦は何かを感じて、助産婦を見た。

助産婦 何か？

妊婦 どうしてだろう……

助産婦 はい？

妊婦 ピクニックに行かなきゃ……

助産婦 え？

妊婦 ピクニックに行かなきゃいけないって、どうしても行かなきゃいけないって、思っちゃったんです。

妊婦はお包みを抱いてゆつくり立ちあがる。

助産婦 おにぎり……

妊婦 え。

助産婦 おにぎりとビールなんて組み合わせ、

妊婦 ああ、いいですね。あ。

妊婦、窓の外を見た。

妊婦 流れ星……？

ヒューーーーーー

と、空気を切り裂く音がする。

助産婦 いいえ、違うでしょう。

ドン。

妊婦 あ……戦車。

行進曲が聞こえてくる。

高揚するような、

行進曲。

お包みの布はいつのまにか、はためく旗になる。

戦車がコンクリートの道を通り過ぎて行く。

通り過ぎていく行進曲。  
やがて、遠く遠くに。  
けれどまだ聞こえ続けている。

長女は、行進曲を聞くともなく、

ザク。

両手で土をかき出す。

ザクザク。

宙に、土を放り出す。

ザクザクザク。

溜息のような、嗚咽のような、泣き声のような、  
声が零れた。

ああ。

一雫、垂れた汗をぬぐう、長女。

また、ザクザクザクザク。

土をかき出す。

長女は誰かに話しはじめる。

誰もいない。

そばにあるのは、

シート1枚。

何かが包まれている、シートが1枚。

長女 昔ね、

ザク。

長女 流行ってたから。

ザクザク。

長女 子どもって、そういうハナシ、好きだから。

ザクザクザク。

長女 子どもだったから。

ザクザクザクザク。

長女 私たち。

掘り進めていく。

長女 12時に合せ鏡を見ると死ぬ時の顔が映る、とか。

長女 鏡に吸い込まれる、とか。

長女 あの世に連れていかれる、とかね。

長女 信じていないくせに信じてるから、

長女 試したくなつて、

長女 でもあれはね、

長女 私たちがね、

長女 お姉ちゃんたちがね、

長女 試したのは、

長女 死ぬ時の顔でも、吸い込まれるわけでも、あの世でもなくて、

長女 なくって、

長女 鏡に、

長女 光をね、

長女 反射、

長女 眩しくて、

長女 見えなくて、

長女 でも、

長女 見るの。

長女 見えないから、

長女 見たくて、

長女 見えなくて、

長女 見づらくて、

長女 見据えて、

長女 魅入って、

長女 見違えて、

長女 やつと、

長女 見え始めたけど、

長女 見ようとしたのはね、

長女 ミライの世界。

長女 違う。

長女 世界のミライ。

いつのまにか、掘り進める速度が増して、  
狂ったように土を殴るように掘っていくと、

長女 は、

突然、

長女 どんなだったっけなあ……

長女、空を見た。

長女 見て見て。爪の先にサイレントスターが乗っかってる。サイレントスターはとっても静かだから。何にも言わないから。周りが騒がしいと本当にどこにいるのか分からなくなるから。だから、静かに。集中しないと聞き逃す。何かを伝えようとしてくれてるのに僕らはいつもそれを聞き逃すんだ。し。全部教えてくれるんだ。僕がどうして息を吸って吐いて吸って吐いて吐いているのか。僕がどうしてここにいるのか。僕がどうして夜眠って朝目が覚めるのか。全部知ってる。迷ったら僕は耳を澄ます。おねいちゃん、目を瞑ると星が見えるでしょう。ぎ

よっと臉押さえつけると。赤黄青緑白流れ星土星みたいな輪っかダイヤモンドダストみたいな細かいキラキラ。ミルキーウェイが見えるでしょう。僕は毎晩空を見上げて星と、宇宙と、空と交信し続けていたけれどナンにも繋がらない。当たりまえだ。サイレントスターは僕の目の中にあっただし、砂粒の中にあっただし、水筒から落ちる水滴の中にあっただし、おねいちゃんたちが吐く息の中にあっただし、靴の裏底にあっただし、睫の先にあっただし、食べ残したおにぎりの米粒にあっただし、

長女 ……ひとつぶ

長女 たったひとつぶ。

遠くで、何かが聞こえる。

銃声のような。

砲弾のような。

大砲のような。

遠くに聞こえていた行進曲が、

少しずつ、

少しずつ、

またこちらへ近づいてくる。

長女、包まれたシーツの端っこを握りしめた。

ぐいぐいとシーツをひっぱり、

コロリと中身が転がり、

長女が掘っていた穴に落ちていく。

コロリ。

スマホのような器具。

コロリ。

少しイカツイ、ヘッドフォン。

長女の手には、シーツが1枚。

残されただけ。

行進曲がさらにさらに近づいてくる。

姉は穴を見下ろす。

風が吹いた。

垂れたシーツが揺れる。

姉の足元で、微かに。

顔を上げる。

風を見ようと試みているかどうかは分からないが、

姉は目を閉じた。

行進曲はどんどん近づいて、

長女の間近まで近づいて。

ぶつりと、途絶える。

風だけが吹いている。  
突然。

にゅつと手が出た。  
女の手。

ゆつくりと穴の端をつかみ、  
にゅううつと、頭を出す。

次女 大姉ちゃん、大姉ちゃんってば。

長女は、顔を出した次女を見下ろした。  
驚く。

長女は、何も言えないほどに驚く。

次女 あのねあのね、クラスでね、噂のミラー。やってみようよ噂のミラーミラーミラー。

長女 ……ちいちゃん。

ぬぼつと上半身を突き出して、

次女は膝を穴の端っこに引っかけて、

次女 あ、よっこいせー。

穴から抜け出す。

次女は長女の横に並んだ。  
すると、

にゅつと、穴からまた手が伸びた。

長女はまた伸びた手を見下ろす。  
驚く。

長女は、何も言えないほどに驚く。

三女 ちい姉ちゃああああん……！

必死な声。

三女 大姉ちゃああああん……！

次女 もお、うるさいのが来たあ。

にゆううつとまた頭が出る。

三女 らんちゃんもいくおー……！

次女 あんたは早く寝なさいって。

飛び出した頭を穴に戻そうと押し込める次女。

三女 イタイイタイ、ちいちゃん、イタイ！

次女 子どもは寝る時間なの。

三女 ちい姉ちゃんだって子ども、

次女 あんたより大人。

頭をぐいっと突き出す三女。

押し戻そうとする次女。

次女 寝なさいってば。

三女 やだ。

次女 夜はオバケでるんだから。

三女 らんちゃん怖くないもん。

次女 うるさいって、バレるじゃんよ。

三女 大姉ちやあん、ちいちゃんが意地悪するう。

次女 大姉ちやあん、こいつうるさい。

きあ。きあ。きあ。きあ。

次女と三女は、きあきあど、きあきあど、戯れる。

驚き呆然と立ち尽くすだけだった長女は、

幼い頃から見慣れた次女と三女の小競り合いに、

思わず、

いつものように仲裁に入った。

長女 やめなさい。

次女 だって、

三女 だって、

長女 何時だと思ってるの。

次女 はッ！ 何時！？

長女 え、あ、

次女の勢いに思わず。

長女 えと、

腕時計を見た。



長女 11時ごじゅう……

三女 もう？

次女 急がなきゃ、

三女 急がなきゃなきゃ、

三女が穴から這い出てる。

次女と三女は長女が持っているシートをつかんだ。

シートが一枚。

ふわりと空気を孕んで、

3人の上にゆっくりと落ちてくるシートを見あげながら、

長女 あの頃は、あの頃はね、

あの頃は行進曲など聞こえなかった。

小さな白いシーツの山が出来た。  
もぞりもぞりと小さな山は動く。  
くすくすと笑い声。

内緒話でもするようになり、くすくすと笑い声。  
カチリと懐中電灯をONにする音がして、  
シーツの内側から布が透けて光る。  
昔、内緒の秘密基地を作った。  
シーツのなかで、内緒の世界をつくった。  
幼い、三人姉妹。

長女 しー。

次女 しー。

三女 しー……

静かに、という仕草をしながら、くすくす笑う。

長女は懐中電灯を抱えて、

次女は緑と虫がいつぱいのガラスケースを抱えて、

三女はお菓子を抱えて、シーツの中。

長女 見て。

懐中電灯の灯りに手をびったりつけて。

次女 わあ。大姉ちゃん、指の端っこが赤い。

三女 うん、赤い。

長女 どうしてだと思おう？

三女 大姉ちゃんの指だからだよ。

長女 体の中が透けて見えてるから。

三女 私のは？ 私のは？ 私のは！？

長女 同じよ。

三女 違うかもしれないもん。

次女 私パープルがいいな。

長女 血だよ。

三女 じゃ私金色。

長女 血の色なんだってば。

三女 金色だもん。貸して。

三女も手をびったりつけてみる。

三女 あ。

次女 ナンだふつー。貸して、私は絶対パーズ、

今度は次女が試してみる。

次女 あ。

三女 ナンだふつー。

長女 パールなら即入院だからね。

三女 どうして赤いの？

長女 流れてるから。

次女 何が？

長女 だから、ち。

三女 ち？

長女 赤い血。

次女 これ血の色？

長女 懐中電灯の灯りで透けて見えるの。

三女 血の色ってなんで赤いの？

次女 それはあれだ、あれ。

三女 あれって？

次女 あれはアレ。

三女 ちい姉ちゃん、知ったかしてる。大姉ちゃん、なんで？

長女 なんか……血の中に赤くなる色のモトがあって、

三女 モトって何？

長女 なんだったかな。

三女 なんで？ なんで血って赤いの？ なんで？ なんで？

長女 そう決まってるの。

三女 なんで決まってるの。

長女 昔から決まってるの。

三女 人間の血は赤って？ なんで？

次女 ニンゲンだからに決まってるじゃん。バカ。

三女 ちい姉ちゃんなんも知らないくせに。

次女 あんたよりは賢いんだよ、バカ。

三女 バカっていうヤツバカ。

次女 バカ。

三女 バカバカ。

次女 バカバカバ

三女 カバ

次女 カバのバカ。

長女 しっ……！

3人、一瞬外の気配を気にする。  
かすかに赤ん坊の泣き声がする。

長女 起きちゃった？

3人、耳を澄ます。

しばらくして、泣き声は止む。

息を止めて。

じっとする。

長女 しー。

次女 しー。

三女 しー。

三女 パパとママも起きちゃったかな？

長女 しー……

と言いながら耳を澄ます。

次女と三女も真似して耳を澄ます。

長女 静か……？

次女 寝たかな？

三女 もう泣いてない。

次女 今なんじ？

長女、目覚まし時計を取り出し、驚く。

長女 11時59分。

次女 うっそ！

三女 12時なっちゃうよ！

長女 静かにして。バレたら私が怒られるんだから。

次女 早く出してよ。

三女、うんせと少し大きめの鏡を取り出した。

次女と三女で鏡を持つ。

長女がふたりの間で懐中電灯を抱きしめる。

長女 もっとちゃんとかぶって。光洩れるから。

次女 そっちから洩れるって。

長女 ママにバレちゃうからちゃんと。

三女 光で鏡ピカピカにするんでしょ？

次女 反射させるんだよ。

三女 ピカピカしたら見えにくいのに？

長女 見えにくい、その光の反射の向こうを覗くのよ。

次女 12時ぴったりにね。

三女 ミラーでミライ？ ホントに見えるのかな。  
次女 うちの学年でもみんな噂してるし。

三女 でもまだ誰も見られてないっていうのが、うちの学年でのジョーホーだよ。  
次女 願いが足りないんだよ。

三女 なんて願うの？

長女 ミライの世界が見えますように。願って。

次女 ミライの世界が見えますように。

三女 ミライの世界は甘い……

次女 甘い！？

三女 道とか、家とか、全部甘い。ケーキとかで出来てて、花壇の花とかお砂糖のカタマリで、  
次女 吐きそうバカ。溶けたらベッタベタになるじゃんよ。

三女 だって私が見たいミライの世界は甘いのがいいんだもん。

次女 何ミライだそれ。

三女 クリーム王国。

次女 おえ。

三女 おえって言うな。

次女 森だよ。ゼーんぶ森。スイーツ禁止。

三女 ヤだ。そんなのケムシばっかになる。

次女 ケムシ嫌がるなバカ。

三女 おえ。

次女 おえって言うな。

三女 今、もぞって動いた。気持ち悪い。

次女 これはキレイなの。

三女 ちい姉ちゃんのガーデン持ちこまないでよ。

次女 あんただってお菓子持ちこんでる。

長女 し。またあの子起きちゃうでしょ。

次女・三女 し。

三人姉妹はぐっと息をつめる。

次女 大姉ちゃんは？

ひそやかな声で次女が聞く。

長女 私？

三女 うん。大姉ちゃんがソーゾーするミライは？

長女 分かんないわ。

懐中電灯を見た。

長女 分からないから、見てみたい。

長女 見えるものならね。

長女 11時59分50秒。

長女、ぐつと腕時計を突き出す。

三女 9、

次女 8、

長女 7、

3人 6、5、4、3、2、

懐中電灯が鏡に反射して、

姉妹 わあ。眩しい……

眩しくて、長女は目を覆った。

しばらく。

そのまま。

時間が止まったような、沈黙。

カチコチ。

ゆっくりと時間が流れ始める。

覆った手が

静かに、静かに顔から離れて、いく。

目の前には食卓。

白いテーブルクロス。

ふと向かい側の席を見ると、弟が座っている。

手元で何かを操作している。

ぼそぼそと、呟いた。

弟 仕事中は絶対私語厳禁です。

録音しているのだろうか。

弟 乗船客が勝手にしゃべるのは、そのままにしておきます。

ぼそぼそと、

弟 こつちからは決して話しかけてはいけません。

呟く。

弟 ましてやこの海面上国境を超え、地上を、祖国を捨て、海上キャンプに逃げ込もうとする理由を、

弟 決して。

弟 聞くことなかれ。

弟 絶対私語厳禁。

弟はスマートフォンのようなものを、

ケースの中に仕舞う。

ダシの匂いがしたような気がして振り向くと、

大きな鍋を持った次女がやってくる。

その後ろを、食器を持って三女がやってくる。

湯気の立つスープを三女が食器に注ぐ。

食卓に、スープ。

おいしそうな湯気が立ち上る。

食事は4人分。

大人の三人姉妹、ゆっくりと椅子に座った。

次女が、弟にカバの帽子をかぶせると、

次女 あんた超絶似合うわよ。

弟 ありがとう。

三女 弟よ、バカにされてんだ、それくらいは理解しろ。  
次女 違う、愛情よ。バカにカバの帽子なんて愛情に決まってるじゃない。  
三女 悪意に決まってるよね大姉ちゃん。  
長女 ちいちゃん、悪気はないのよ。  
次女 偽善よりマシでしょう。  
弟 おねいちゃん。  
3人 なに。  
弟 ぼくはかばじゃないしばかじゃない。  
長女 分かってる。  
次女 でも似合ってるわよそれ。  
弟 ありがとう。  
三女 絶対分かってないなこれは。  
長女 で、何しに帰ってきたの、ちいちゃん。かばの帽子渡しに来たわけじゃないでしょう。  
次女 家出てきたの。  
三女 また？  
長女 すぐ戻るんでしょ。  
次女 戻らないわよ。  
長女 って言っても、どうするの。  
三女 ちい姉ちゃんがひとりだけでやっていけるわけないっつーの。  
次女 いけるわよ。  
三女 ちい姉ちゃんナニが出来る。パート探すのも大変なジダイに何が出来るんだよ。  
次女 だからここに帰ってきてるんじゃない。  
長女 うちも余裕のないのよ、ちいちゃん。  
次女 あらお気になさらずよ。自分の部屋に戻るだけだから。  
三女 大姉ちゃん、部屋代毎月いくらからもらいな。  
次女 なんて実家に家賃払わなきゃならぬのよ。  
三女 ほら完全頼りきるつもりだ。ちい姉ちゃん、いくつ？  
次女 困ってる時だからこそその実家でしようが。  
三女 どうせ働く気もなければりや家のこと手伝う気ないくせに。  
次女 どーして実家なのに家事なんかしなきゃならないのよ。こっちはね何年も主婦やってきたんだからね。  
三女 ぐうたら主婦代表のくせに。  
次女 手抜きも技術がいるの。  
三女 栗原はるみを見習え。  
次女 はるみは、あれは職業主婦なのよ。  
三女 出てきたんじゃないやなくて、追い出されたの言い間違いだろ、どうせ。  
次女 すぎる旦那を蹴散らかして出て来たのよ。  
三女 ぐうたらすぎて子どもを姑に連れていかれちゃったくせに。  
次女 連れて行かれたんじゃない。誘拐されたの。  
三女 モノは言いようだな。  
次女 あんたは、  
三女 なに。  
次女 なんてここに帰って来てるのよ。





次女 あんたみたいに好き勝手生きてる人間にはわかんないつらさがあるのよ。  
長女 やめなさい。

次女 あんたなんかフラフラ好きなことしてるわりには月末になったら大姉ちゃんに泣きついたでしょ。

三女 泣きついてない。あれは支援。

次女 支援！？ シーえーん！？ っていうほど大層なことやってたわけ？

三女 有意義なこと。

次女 ゆーいぎ？ 人ん家の貯金食っておいて、ゆーいぎ！？

三女 私は世界のために活動してた。

次女 はあ？ 世界？ ナニサマ？

三女 今度は地元のために活動するんだからちい姉ちゃんとは違う。

次女 オトコによって自分のやること変わる尻軽女。

三女 違う、やつと自分のやること見つけたんだから。看護してるんだよ。

次女 なにを？

三女 だから地球。そして人間。

次女 はッ。

三女 病気にかかっているのは地球そのものなんだ。人間がどうにかしなきゃ、私ら死にそうな船に乗ってるよう  
なもんなんだよ。未来のために、地球のために、私がやろうとしていることは、自然の復活、緑の楽園、汚染され  
た空気の再生、土地の改善、もう地球自身が出来る浄化作用は限界来てるんだから。治癒力の支えになるように、  
地球のための漢方処方みたいなもんで、

次女 言っとくけど去年の11月に大姉ちゃんに泣きついて送ってもらったお金は私の貯金だからね。

三女 嘘！

次女 ホント。大姉ちゃんだって余裕ないんだからね。

三女 大姉ちゃん！

長女 パパとママの葬儀があったからちよつと苦しくて。

次女 あんたはね、自由だとか言いながらもすごく、とてつもなく、どうしようもなく、家族に迷惑かけてる  
の。

三女 人にばっかり頼る欠陥人間のちい姉ちゃんには責められたくない。

次女 あんただって大姉ちゃんに甘え過ぎじゃない。

三女 だから支援だっつー、

長女 ふふ。

長女が笑った。

次女 大姉ちゃん。

三女 何笑ってたんだ。

長女 だって、

長女、くすくす笑う。

長女 おっかしい。

次女 だから何がよ。

長女 ひっくり返っちゃったなあって。昔はちいちゃんのほうが緑緑緑、そこらじゅう森でいっぱいになる仕事

するのかなって思っていて、らんちゃんのほうがふわふわ甘いお菓子作るお母さんになるのかなあって、想像してたんだけど、

三女 私は大きくなって賢くなって、ちい姉ちゃんはバカになっただけだろ。

次女 私は現実見てるだけ。あんたは理想と男を追いかけてバカなことやってるのよ。

長女 時間が過ぎると、ずいぶん変わっちゃうのね。

次女 大姉ちゃんがなんも変わってないからこうなってるんですよ。

長女 え、何の話？

三女 出た。

次女 何よ。

三女 直角で話を曲げた。ちい姉ちゃんの必殺技だ。

次女 だって、大姉ちゃんがこんだから、

次女は弟のカバの頭をつかむ。

次女 こいつ、いつまで経っても働かないで、のーのと、家でゴロゴロしてんのよ。

長女 それ私のせい？

次女 他にないじゃない。

三女 ま、一応長男だし？

次女 末っ子長男はだいたい甘やかされすぎなのよ。

三女 それを言うなら次女って自分勝手のオンマイウェイ。

次女 ヒトを大まかに分類しないでしょ。

三女 そっくりそのまま返す。

長女 あのね、

三女 でも大姉ちゃんの甘やかしは、一理あるね。優しいから。

長女 あの、

次女 大姉ちゃん、自分の人生どっかに置いてきちやってバカなこいつの世話ばっかして、

長女 あのね、

三女 もっと好きに生きればいいのに。

次女 あれよ、長女の苦悩ね。

三女 また大まかに分類してる。

次女 冷静な分析よ。

三女 でもこいつがバカだから働けないのは大姉ちゃんの優しさのせいじゃないだろう。

次女 工場行け、缶詰工場。

弟 はたらいてるよ。

次女 え。

三女 え。

次女 え？

長女 ええ。そうなの。

三女 え？ 働いてる？

次女 え、働いてるの？

長女 ええ。働いてる。

次女 こいつが？

長女 ええ。  
三女 働いてる！？  
次女 え？ はらたいら？  
長女 働いてるの。  
弟 うん。ぼく。はたらいているんだよ。

次女と三女は信じられないという目で弟を見る。

次女 配送とか？  
三女 や、無理だろ。  
次女 掃除とか？  
三女 厳しいな。  
次女 ハンダつけ、  
三女 古くないか？  
次女 仕訳、  
三女 出来るか？  
次女 やっぱ缶詰こう、

長女は黙って食事をしている。

三女 大姉ちゃんが無言でかばってる。  
次女 なんだ、やっぱり嘘、  
長女 本当よ。  
次女 ならちやんと生活費も入れてるわけ？  
三女 大姉ちゃんホントこの子には特別甘いんだから。  
弟 うそじゃないよ。はたらいてる。  
次女 嘘じゃないならねえあんた何の仕事してんのよ？  
弟 ぼくは、  
次女 あ！？ きこえない。  
弟 ぼくは、  
三女 ヴォリュームのつまみ回せ。  
弟 ぼくはあ、

その時、サイレンが鳴った。

次女 やだ、また？  
三女 どの土地いってもやってること変わらないね。  
次女 そんな時代だしね。  
三女 だから私が活動している意義が、  
次女 焼け石に水よ。  
三女 ちい姉ちゃんみたいなたちが多いから、  
次女 すぐにおさまらないみたいね。

三女 あ、ちよつと長め？

次女 一応シエルター入つとく？

三女 一応ね。

次女と三女、スープレ皿を持ったまま立ちあがる。

次女 あんたもスープ持つて行くの？

三女 当たり前だ。

ガタン。

弟が勢いよく立ちあがる。

次女・三女 ？

弟は右手をしっかりと上げて立っている。

弟 仕事の時間です。

次女 ……は？

弟 仕事の時間です。

三女 え、なに言つて、

弟 仕事の時間です。

弟は右手を長女に差し出した。

長女 ええ……そうね。

長女はテーブルの下からトカレフを取り出す。

次女と三女はそれを見る。

長女 いつてらつしゃい。

弟は長女が差し出したトカレフを手を取った。

ゆつくりと。  
ふわりと。

1枚のテーブルクロスは、  
揺れる海面になる。

キラリ。  
光る。  
ミラー。

鏡に映るのは、弟。

ジョリ。  
ジョリ。

ヒゲを剃る。

ポーン。

何かの音がする。

ヒゲを剃りながら、弟は少しその音に耳を傾ける。  
業務アナウンスだ。

「3番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。  
繰り返します。3番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。」

30

顎についた石鹸の泡を拭くと

弟はヘッドフォン装着して船に乗り込んだ。

乗船客はすでに3人。

魔女のような老婆たち。

流れる声は、きっと弟のもの。

弟 昨日は3人運んだ。ひとりには男、40代くらい。無精ひげ。足元ふらつく。酒くさい。ひとりは女、20代。  
剥げたネイルばかり気にしていた。ドーせみんな最後は死ぬんだしっていうのがログセ。最後のひとりは、おじ  
さんのようなおばさん。パンチパーマのパンチがキいてた。

両手で何かをつかむ仕草。

弟 仕事中は絶対私語厳禁です。

前後に動かす。

弟 乗船客が勝手にしゃべるのは、そのままにしておきます。

前後に動かす。

弟 こつちからは決して話しかけてはいけません。

前後に動かす。

弟 ましてやこの海面上国境を超え、地上を、祖国を捨て、海上キャンプに逃げ込もうとする理由を、

弟 決して。

弟 聞くことなかれ。

弟 絶対私語厳禁。

弟の手の動き。

船のオールだろうか。

ギイ……

と、船が軋む音がする。

弟 仕事の鉄則を、忘る、べ、からず。

ギイイギイイ

弟 僕はすぐに忘れちゃうから。

ギイギイギイイ

弟 何でもすぐに忘れちゃうから。

ギイギイギイギイイ

弟 こうやって、

弟 毎日、

弟 自分に、

弟 言い聞かすのです。

弟 仕事の鉄則を、忘る、べからず。

弟 忘るべからず。

ギギイ

弟 べからず。

弟 からず。

弟 らず。

弟 ず。

弟 ず。

弟 ず。

弟 ず。

弟 Z

弟 Z Z

弟 Z Z Z

こつくりこつくりと、弟は船を漕ぎながら、船を漕ぐ。

船には3人の老婆たちが乗っている。

老婆1 ちよいと。

弟は杖でこづかれた。

弟 あっ……！

老婆1 船漕ぎながら器用に船漕ぐんじゃないよ、危ないだろうよ、にいちゃん。

弟、何も言わずにただペコリと頭を下げた。

老婆1 居眠りするかね普通。運転中だよ。

老婆2 ババア3人だからって仕事の手抜くんじやないよバカヅラ。ちゃんと送り届けな。

老婆3 え？ なんつった？

老婆2 あんたに言ったんじゃない。

老婆3 あそう。ここでパスポート見せるのね。

老婆1 一番若いくせに耳が遠いんだから。



老婆2 難民にパスポートなんかいらぬのよ。

老婆1 こつちじゃない、そつちそつち。どこ見て言つてるの。

老婆2 もう細かいところ見えないのよ。ボンヤリとしか見えないのよ。

老婆3 え？ なんつった？

老婆2 ハイハイ。

老婆3 え？ なんつった？

老婆2 ハイハイ。

老婆1 海上キャンプまであとのくらいかねえ。

老婆3 え？ いま10万年つて言つた？

老婆1 海なのよ、宇宙じゃないのよ。

老婆2 言つても聞こえてないから。

老婆1 地上の難民キャンプはもう満員すぎてね、

老婆2 言つても届いてないから。

老婆3 地上の難民キャンプ満員。

老婆2 なんでそこだけ聞きとるのさ。

老婆1 おい。

また、コツンとこずかれた。

弟は振り向く。

老婆1 いつになったら着くんだい？

弟はただペコリと会釈をするだけ。

老婆1 だんまりだよ、この子。

老婆2 オシかい？

老婆3 ああ、ああ。

老婆1 長くなるのか、もうすぐなのか、どつち。

老婆3 ああ、ああ。

老婆2 揺れる船だねえ。

老婆1 老体に長旅は厳しいのに。

老婆2 ホントに行き着けるのかいねえ。

老婆1 着かなきゃならないさ、せがひでも。

老婆3 おにぎり。

老婆3がおもむろにおにぎりを差し出す。

老婆3 かかお。

老婆1 おかかだろ。

老婆たちはおにぎりを食って、

海上から地上を見る。

老婆 1 おお、おお。こつから見ると、まるで対岸の火事だねえ。

赤く染まる地上を眺めている。

老婆 2 離れて見るときれいだねえ。

遠くから聞こえるのは、砲弾の音かもしれない。

老婆 1 離れてりやね。

老婆 2 あそこに子どもや夫がいたら気が狂うだろうね。

老婆 1 なら私たちは幸いかい？

老婆 2 いやあ、どうだろう。

老婆 1 綺麗だろうけれど、私は小指の爪が痛むよ。

老婆 2 小指の爪？

老婆 1 自分の身体の中で一番小さきところがね、痛む。火花が飛び散って赤い花が咲いて赤い血が流れるとね、誰のだろうとね、痛まないはずの小さな小さな爪が、先が、痛む。

老婆 2 と 3、向こう側を見る。

つられて、弟も船を漕ぎながら見る。

老婆 2 ああ、うん。何言ってるか分からないけど、感じることは出来るね。

老婆 1 それは私らが女だからかねえ。

老婆 2 いやあ、ニンゲンだからだよ。

老婆 1 じゃ、あそこで赤い火花ぶっぱなしてるのは人間じゃない？

老婆 3 カタマリ。

老婆 1・2 うん？

老婆 3 ニンゲンのカタマリ。

おにぎりを見た。

老婆 3 米、粒。ひとつひとつは、米。粒。粒。粒。固まったら、おにぎり。別のもの。ニンゲン、固まったら、

巨人。

老婆 1・2 巨人……？

ざあああ……波の音。

揺れる船の上、三女が足元あぶなく立ちあがり、

老婆 1、2 は、「おお……」と船の縁に手をつく。

弟はオールを漕ぐ手に力を込めなければならなくなる。

おお、

ざああああ、

おお、

ざああああ、

老婆3はおにぎりを食り食いながら、

ボロボロとおにぎりの、米粒をこぼしていく。

老婆3 いつもいつもね、透明な巨人が現れるんだよ。ジダイジダイ透明巨人。正体はこれだね。

ぼろりと零れた米、ひとつぶ取り出す。

老婆2 米？

老婆1 一粒だろ。ニンゲンひとつぶ。

老婆3 ひとつぶひとつぶ、ひつつきあつてかたまりあつて一緒くたになつて、かたまりから離してみれば、一粒なのに、カタマツたら、巨人になつてもう止められないんだ。

その米一粒をまたおにぎりのカタマリの戻す。

老婆3 あるジダイジダイ透明巨人は火花を創りだして、あるジダイジダイ透明巨人は膨大エネルギーを創りだして、あるジダイジダイ透明巨人はゼーんぶ、何もかも、無視した。ジダイジダイ透明巨人、ジダイジダイ破壊の透明巨人、創つてんのはこの一粒一粒だ。ジダイジダイ透明巨人は神出鬼没で、そのくせこのたった一粒が自分で巨人を創りだすことも出来たりして、でも思わぬところで現れたり、思わぬところで崩れ去ったり、そんでアトでおもうんだ。こんなはずじゃなかったのになあつて、ええ？ なんつった？

老婆2 何も言つてない、あんたの独壇場だよ。

老婆3 ああ、緑茶が欲しいねえ。

老婆2 一番若いのもうボケてきたのかい。

老婆1 いいやあ、ボケたやつが真実語つてんだよ。

老婆2 そういうのは狂人の戯言で島流しだね。

老婆1 私はあるの対岸の火事を創る透明巨人の一粒にはなりたかないね。

老婆2 だから難民になるんだらう。

老婆1 遠く離れるさ。

老婆2 逃げるのは？

老婆1 ん？

老婆2 逃げるのは、いいのかね？

老婆1 イヤなところ突くね。

老婆2 いやさ、ちよつと考えちゃつて、ねえ、逃れようとするのも、また、透明巨人の一粒にならないのかしらねえ。

老婆1 ババアに何が出来るの。逃げるだけさね。

老婆3 逃げきれぬのかねえ？

老婆1・2 ……どうだろうね。

老婆3 逃げきれないねえ。生きてるからねえ。

老婆2 あ。

老婆1 また流れ星ながれた。

無言の弟も、対岸の火事を見る。  
4人はただひたすら。  
見つめる。

老婆 1 にいちゃんも食べるか。

おにぎりを差し出したが、  
弟が無言で顎をしゃくる。

老婆 1 いらない？

弟はもう一度、顎をしゃくる。

老婆 1 ああ……着いたかい。

老婆たちは曲がった腰を上げる。  
よっこいせ。

海面を見る。

どっこいせ。

何もない海面。

海面しかない海。

老婆 1 にいちゃん。

3人の老婆は何もない海を見る。

老婆 1 海上キャンプはどこだい？

弟、無言でトカレフを取り出した。

老婆 1 ああ、そういうことかい。

弟は銃口を老婆3人に向ける。

老婆 2 どういうことだい。

老婆 1 そっちなじゃない、こっちこっち。

老婆 2 あ、どうということだい。

老婆 1 情報漏れを防ぐつもりだね。

老婆 2 ばばあが何の情報持つてるっていうんだよ。

老婆 1 民間人のフリするスパイが横行してるからじゃないかいね。

老婆 2 運び屋は信用ならないね。

老婆 1 どの運び屋も同じだろうよ。どうせ中央政府の管轄だろうが。気がつかなかったうちらがバカだね。逃

げたい人間を募っては葬ってるんだね。士気に関わるとか言い出すんだどうせね。にいちゃん、さつさとヤリな。うちらもさつさと地上に別れを告げてサイレントスターに戻ってグレートリバーの流れに乗るさ。

弟 ……サイレント、スター……………

老婆 1 戻るんだ。

老婆 2 身体がなくなったらね。

老婆 3 もとはひとつの流れだから。

老婆 1 グレートリバー。

老婆 3 もとはひとつなのね。

老婆 2 もとはひとつだからさ。

老婆 1 なのにあれだよ。

老婆 2 対岸の火花。

老婆 1 ぶっ放すのは透明巨人。

老婆 3 もとはひとつぶひとつぶ。

老婆 1 こっちじゃジダイジダイ透明巨人。

老婆 2 あっちじゃグレートリバー。

老婆 3 ウンデイの差だね。

老婆 1 もとは同じひとつなのにさ。聞きな。

弟 え……

老婆 1 聞こえるならね。聞きな。全部教えてくれるんだ。どうして息を吸って吐いて吸って吐いているのか。どうしてここにいるのか。どうして夜眠って朝目が覚めるのか。全部知ってる。

弟 呪いの、呪文？

老婆 1 にいちゃんにはそう聞こえるなら、呪いかねえ。

老婆が笑う。

3人の老婆が笑う。

と、まさしく、

呪いのように思える。

弟 この海面上国境を超え、地上を、祖国を捨て、海上キャンプに逃げ込もうとする理由を、

弟 決して。

弟 聞くことなかれ。

弟は撃鉄を起こす。

老婆 3 あんたも。

老婆 3 あんたもジダイジダイ透明巨人の一粒だ。

ざああと、波の音。

かき消すように、  
軽い軽い、手を打つような乾いた銃声が聞こえた。  
3発。

弟は銃声を聞かないように、  
ヘッドフォンから流れるやけに明るい音楽を最大ボリュームにした。

ギイ。

ギイイイ。

揺れる船の上、

弟は音楽だけを聞いている。

弟 ぼくは、

揺れる船の上。

弟 バカじゃない。

老婆の死体が3つ。

見下ろす。

弟 バカじゃ、

「5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。

繰り返します。5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。」

音楽を遮り、ヘッドフォンから業務連絡が入る。

繰り返される業務連絡。

弟 ぼくは、

機械的な繰り返しから逃れるように、弟はヘッドフォンをもぎ取った。

波の音に混じって、何か聞こえたような気がした。

空が、泣いているような気がした。

弟は見上げる。

じっと。

見つめる。

海の水面がきらりと光って、

空と繋がったような気がした。

弟 ……グレート……リバー……？

老婆の死体がゆっくりと起き上がり、  
海の上を歩いていく。  
ゆっくり、  
ゆっくり、  
ゆっくり。  
何かの大きな流れに乗るように、  
老婆たちは歩いていく。  
弟はそれをじっと見送った。

弟  
つつつ……

急激な、吐き気に襲われる。  
引き金を引いた手を、ズボンの布で擦る。  
見えない汚れを拭うように、擦る。  
吐き気を抑えながら、擦る。  
ヘッドフォンからは、業務連絡が繰り返されている。

「5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。  
繰り返します。5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。」

静かな海面が乱れる。  
くると弟が飲みこまれ、  
くると。  
海が弟を包み込む。  
くると。  
弟のベッドになる。

シートに包まって、弟は空中を見る。  
ぼんやりと。

しかし、何かを見る。

そんな弟を、次女と三女はうかがいみる。

黙って食卓に座っているだけの長女に、

三女は冷たい視線を向け、

次女はメンドクサソウな視線を向ける。

長女 そんな目で見ないでよ……

次女と三女は無言で食卓に座る。

テーブルにはトカレフ。

三女 本当に知らないって言いきる？

長女 知らないのよ。

三女 これ持って仕事って、ワケありに決まってるだろうが。

長女 でも本当に知らないの。

三女 聞けよ。喋らせなよ。

長女 守秘義務だって。

三女 はぁ？

長女 だって他に仕事ないらしいから。

三女 大姉ちゃん。

長女 なぁに？

三女 役場の仕事行ってる？

長女 役場どころじゃないでしょう、今の状況じゃあ、

三女 で、今はあのバカに養ってもらっているんだ？

長女 だからね、今は本当に苦しいの、ちいちゃん、悪いけど、

三女 今、ちい姉ちゃん実家住み込み問題はいつでもいいから。大姉ちゃんって、ちい姉ちゃんに負けず劣らずバカなのか？

次女 バカじゃなくって無知なだけでしょー。

三女 ちい姉ちゃん。

次女 ね、もう寝ようよ。シンデレラタイムに眠らないと、私たちすぐ顔に疲れが出る年齢だよ？

三女 真剣に話そうよ。

次女 なんて？

三女 なんて……

次女は欠伸を隠せない。

次女 しょーがないのよ。時代のせい。

三女 ちい姉ちゃん。



次女 やだ、いかにも正義感丸出しの顔やめてよ。

三女 あの子が、これを誰かにぶっ放してたらどうする？

次女 そりゃ一度か二度はもうやってんじゃないの？

三女 な。あ。え。あ。何、とも、思わないの？

次女 だあーってねえ、20年前なら考えられないけれど、そんなこと言ってられない現状でしょ？ だって他にどう生き延びるのよ。ウチの旦那だってやってたわよ。

三女 ……は。

次女 ウチ、子どもと姑と舅がいるんだから他に道はないわけよ。選べないつらさってやつ？

三女 は。は。は。

次女 大丈夫？

三女 はうまく息が出来なくなる。

三女 こんな、

息を整える。

三女 こんな、田舎に、まで、

息を、整える。

三女 こんな、だって、都心だけだと、思ってたのに、

次女 なに、あんた。疎開してきたつもり？ もうどこも一緒よ。

三女 仲間を、

次女 あん？

三女 仲間を、募らなきゃ、この、流れを止められる、仲間を、

次女 やめてよ、目つけられたら迷惑だから。

三女 ちい姉ちゃんどこまでバカなんだ。自覚ないのか、こんなになるまでポケーと生きてた自覚。

次女 やっだ、責任は私たちにもあるとか言い出さないでよ。

三女 あるよ。

次女 デモとかきらい。

三女 フヌケ！

次女 あっはっは。こんな世界。

次女の声に、長女が振り向く。

次女 なくなるならさっさとなくなればいいのよ。

長女 ちいちゃん？

次女 もう守るものなんてないんだし。

三女 そういう諦めが、

次女 あんたが言ってることはどうせボンヤリしたヘーワとかむず痒いもんでしょ。

三女 は、

次女 理念とか、シソーとか、具体的じゃないのよ。ぶっ放してるやつらとそう違いあるの？

三女 はあ！？ 違うに決まってるだろうが、

次女 変わらなきゃいけないんだ、とか、改革しなきゃ駄目なんだ、とか、いまのままじゃいけないとか、もつと、もつとよくしなきゃ、とかね、そんなこと並べた結果が今なんだし、イイコト並べすぎるとうらっ返るのよ。

三女 は。何言ってるの。

次女 進化も進歩も変革もなんもいらぬのよ。

三女 意味分らないから。

次女 あんたも自分の息子の、2歳児のちぎれた右手握りしめてみれば分かるわよ。

時間も音も空気も、凍ったようだ。

長女 ちいちゃんのところ、戦場境界ラインギリギリじゃないよね？

次女 どこからのインフォよそれ。テレビ？ そんなニュース本気で信じてるの？

長女 だって、旦那蹴散らかして出て来たんだよね？

次女はそれには答えない。

次女 もつとスッパリ終わるもんだと思ってたのに、グズグズやってるねえ。あー、昔おばあちゃんがさあ、PKならいいのよおとか言ってたじゃない？

長女 P、PK……？

次女 ピンピンしたままコロっと逝くの略よ。何が起こったかも分からない一瞬で。残されるほうがいるからややくしくてさ、だから残らないの。なんにも。だあれも。なあああああんにも。草も残らない。花さ<sup>ね</sup>咲かない。人影もない。なあああああんにも。そうなりや良かったのに。

三女 無理だ。勝ち残りたい人間がいるから、それは無理。

次女 あんた、

三女が次女を見た。

次女 私みたいな思いをする人をひとりでもなくすために考えられることがあるはずよ、とか言うのやめてよね。

三女 まだ言ってるじゃない。

次女 何も考えたくない。

三女 ダメ。考え続けるんだよ。言い続けるんだって。今すぐにはダメでも、考え続けたら絶対DNAに刻み込まれるんだって、進化のレベルにまで行かなきゃ、今、私らは新しい人間のもとを創るための土台なんだよ。100年先の、ううん、もつと、1千年、1億年先の人間のための、

次女 なんて？

三女 え。

次女 なんてあるかどうかも分からない未来の人間のために私が考えなきゃならないの？ 誰が考えてくれたの、私の今、あの子の今。100年前の人間？ 1千年前の人間？ 1億年前の人間？ 誰がよ？

三女は黙った。

長女は次女の手を握った。

が、

次女は払いのけて立ちあがった。  
サイレン。

再び、サイレン。

のそりとシートから這い出る弟。

弟 おねいちゃん。

三人姉妹は弟を見た。

弟 仕事の時間です……

弟は右手を差し出す。

弟 仕事の、

三女 行かなくていい。引きこもりな。

シートで弟をくるむ。

次女 つつたつてねえ、食べなきゃならないからねえ。自給自足出来るようなキレイな土地なんてどこにもないのよ。

三女 だからって、

弟 おねいちゃん。

三女 大姉ちゃん止めなよ。黙ってないで。

長女 私、

弟 ぼくはかばじゃない。

三女・次女 バカだよ。

弟 ぼくはたったひとつぶで、

三人姉妹たちには何のことだか分からない。

弟 巨人の、倒しかたが、わからないだけ。

弟はもう一度右手を差し出した。

弟 仕事の時間です。

三女がトカレフを手取る。

三女 やりたくないことはしなくていい。

三女 逃げたっていい。

三女 みんながやってるからってあんたまでしなくていい。

弟 違うよ。

三女 なにが？

弟 ぼくはもう巨人の一部になっちゃったんだ。

三女 あのね、

弟 おにぎり。

三女 え？

弟 米ひとつぶが、おにぎりやめまーす……って、零れ落ちることは、出来ないんだよね。

三女 ……誰か通訳して。

次女 そのまんまなんじゃない？

三女 大姉ちゃん。

弟 仕事の時間です。

長女は、トカレフを渡そうか迷っている。

三女 大姉ちゃん！

迷い続けている長女の手から、

弟がそつとトカレフを抜き取る。

弟 行ってきます。

弟が食卓から去っていく。

三女 待ちなさい。

三女が食卓から立ち上がり、鞆の中に何かを突っ込んで、

三女 待て！

弟の後を追った。

立ち尽くす長女と、ゆったり座る次女だけが残った。

トカレフを弟に差し出すことも出来ず、  
かといって、引つ込めることも出来ない長女の手が、  
どうしようも出来ずに固まっている。  
その手の行く末を次女はじつと見ていたが、

次女 大姉ちゃんは、

長女 え。

次女 何がしたいの？

長女 え……

次女 昔さ。

次女 12時ぴつたり鏡に光を当てたら未来が見えるとか、なんかそんな遊びしたこと思い出して。

長女 ……ああ。

次女 あれやろうって言い出したの、大姉ちゃんでしょ。

長女 ちいちゃんじゃなかったかな……

次女 盛りあがったのは私だけど、言いだしっぺは、大姉ちゃんだったと思う。

長女 それが、

次女 でもそのあと憶えてない。

長女 え。

次女 大姉ちゃんの反応、憶えてない。やろうって言い出すわりにはね、いつもそんな感じ。

長女 それが何、

次女 遠慮してるのか、とか、思ったこともあるけど。私らが結構言いたい放題だし、でも、

次女は長女が何か言うだろうと見たけれど。

次女 何をどうしたいとか、ただ単にないんでしょ？ ああ、そう、ああ、そうなの、ああ、そうなんだ……つて相槌打ってりや時間は過ぎていくしね。大姉ちゃんが何もしないのは納得よ。得るものなければ失わずに済むから。

次女が椅子から立ちあがって眠たそうに部屋を出ようとした時、

長女 決めたの。

長女が答えた。

長女 私、決めたのよ。

次女が振り返る。

長女 あの子が、この仕事始めた時に、もう、決めた。

次女 何を？

長女 何も、してやるものかって、決めた。

次女 え？

長女 だけど、見てやろうって。見続けてやろうって。見えないけれど流れていく空気とか、虚しいけれど流れてくるニュースとか、乱暴に流れていくだけの時間とか、見つめ続けてやろうって。賛成も抵抗も出来ないなら、見るしかないから。おぞましいことも、全部。見てやるの。って、決めたの。

次女 そう。

長女はじつとテーブルに視線を落としたまま。

次女 私はもう何も見てやるものかって、決めてるから。

行進曲が聞こえる。

足並み揃った足音。

無数の。

それがいつのまにか足並みが揃いすぎて、

あんまり揃いすぎて、

やがてひとつの大きな足音になる。

ドシン。

ドシン。

ドシン。

ジダイジダイ透明巨人の足音が、

聞こえてくる。

いつのまにか。

三女が戻ってきている。

心配を感じて、次女が振り返る。

次女 びっくりした……帰ってきたなら何か言いなさいよ。

三女は突っ立ったまま。

次女 どうしたのよ？

何も答えない。

長女も不思議に思っ

長女 なあに？

三女の顔は強張っている。

長女は立ちあがって三女の傍までやってくる。

長女 何かあったの、そんな怖い顔し……

長女は、何かに気がつく。

長女 どうしてあなたがそれ持ってるの……！

三女の手には、トカレフ。

次女、驚いて三女からトカレフを取り上げる。

次女 あいつは！？

三女は答えない。

次女 ねえ、あいつは？

三女の顔は強張ったまま。

次女 何にも持たないで仕事に行かせたの！？

三女 持たせた。

次女 じゃなんであんたが持つてるのよ。

三女 こっちのほうが、性能、いいんだよって、別のものを、渡した。

次女 別のもの？

三女 上等な、皮袋に、いかにも、大事そうな感じで、渡した。  
長女 ……何を？

三女は答えない。

次女 あんたがこれより性能いいもの持つてるわけないじゃない。

三女 あの子、バカだから、すぐに信じたけど。

長女 ねえ。何を渡したの？

長女が三女の体を揺する。

長女 ねえ。

三女は黙ったまま。

長女 ねえ！

長女が三女を大きく揺さぶると、

三女が持っていたカバンが落ちてゴロンと人參が数本床に転がった。

次女が一本、取り上げる。

思わず、笑ってしまう次女。

笑えない長女。

三女 お姉ちゃんたちは、あの子が人殺しでも平気？ しょうがないんだって、開き直る神経がもうおかしい。  
駄目なんだよ、絶対にそんなことを許しちゃ駄目。こんなものがあるから感覚マヒするんだ。

ぼちゃん。

三女は鍋のスープの海にトカレフを投げ捨てた。

次女は急いで取り出し、

次女 これは自衛になるの！

三女 攻撃とどう違う？

次女 あんたはこつから逃げようとする人の必死さを知らないからそんなヌルいこと言うのよ。

三女 そんな必死の人間を、あの子はぶっ放してるんだ。

次女 これがなかったらどうなると思うの！？

ピインと、張りつめた空気の音が聞こえるような、沈黙。

長女 ……どうなるの？

長女 ねえ、ちいちゃん……どうなるの？



次女は言いたくない。

三女 それでも。

三女の意志は硬い。

三女 それでも。絶対に殺しちゃいけない。

次女 あの子のほうのが殺されても？

三女 こんな世界がおかしいんだ。

次女 だけど生きていかなきゃいけないのよ。

三女 理想を語り続けなきゃ未来が死ぬ。

次女 あんたの理想があの子を殺すことになっても？

三女 私は間違ってる。

次女 みんなそう言うのよ。

長女 やめなさい！

次女と三女は黙る。

あまりの大声に、長女は自分で驚く。

長女 探しにね、

長女 探しに、行かなきゃね……

長女はウロウロと歩くが、

長女 でも、

長女 守秘義務があるから、

長女 どこに行ってるのか、

長女 知らなくて、

長女 私、

長女 見送ってた、

長女 だけだから。

どこに行けばいいか、分からずウロウロと、ウロウロとするだけ。

次女 大姉ちゃん……

長女はウロウロ。

三女 大姉ちゃん……

長女はウロウロ。  
ウロウロと歩き続ける。

長女 探しに行かないきゃ。

心もとない足元。  
ウロウロと、

部屋の中を歩くがそれはいつのまにか、

「大姉ちゃん！」

次女の声が後方から聞こえる。

「大姉ちゃん！」

三女の声も後方から聞こえる。

長女はフラフラと歩き続ける。

家の食卓は遙か後ろに流れる。

まるで車のバックミラーに映っては流れて消えていく背景のように。

鍋もスープ皿も流れて消えていく。

「どこ行くのー？」

次女の声がはるか後方から聞こえる。

長女 探しに行くのよ。

「どこ行くのー？」

三女の声がはるか後方から聞こえる。

あるき続ける長女の後ろには、もう何も見えない。

何もない、何もない風景だけが延々と続いている。

どこもかしこも似たような、何もない風景。

延々と、

延々と、

時々流れ星のような光が飛ぶだけ。

延々と、

延々と、

何もない。

何もない、だけがある。

長女の心もとない足音はささやかであるが、

少しずつ、

少しずつ、

その足音は力を増していくようだ。

ド  
ド  
ド  
ドシン

長女 探しに……

ふと、長女は後ろを振り返る。

足音は聞こえなくなる。

長女はちよつとだけ躊躇しながら、  
一步を踏み出す。

と、

ドシン。

響いた。

もう一步踏み出すとまた、

ドシン。

響いた。

長女は歩きながら耳をそばだてる。

足音を聞いているのではない。

足音の奥のほうに隠れているような  
別の音に耳を澄ます。

小さく。

微かに。

聞こえる。

次女 わぁ。大姉ちゃん、指の端っこが赤い。

三女 うん、赤い。

三女 私のは？ 私のは？ 私のは！？

次女 ナンだ。ふつうー。

三女 どうして赤いの？

長女も小さく、微かに呟いた。

長女 流れてるから。

次女 何が？

長女 だから、ち。

三女 ち？

長女 赤い血。

次女 これ血の色？

長女 懐中電灯の灯りで透けて見えるの。

三女 血の色ってなんで赤いの？

次女 それはあれだよ、あれ。

三女 あれって？

次女 あれはアレ。

三女 ちい姉ちゃん、知ったかしてる。大姉ちゃん、なんで？

長女 なんか……血の中に赤くなる色のモトがあって、

三女 モトって何？

長女 なんだったかな。

三女 なんで？ なんで血って赤いの？ なんで？ なんで？

長女 そう決まってるの。

三女 なんで決まってるの。

長女 昔から決まってるの。

三女 人間の血は赤って？ なんで？

次女 ニンゲンだからに決まってるじゃん。バカ。

ざあ

ざああ

ざあああ

どのくらい歩いたのだろうか。

波の音が聞こえる。

長女は振り返る。

ざあ

ざああ

ざあああ

波が足元まで打ち寄せる。

ざあ

ざああ

ざあああ

長女は海の遠くのほうまで見据える。

太陽がゆつくりと海に沈んでいく。

キラキラの夕陽。

波に反射して、キラリ。

鏡のように輝いた。

長女

……ミラー……

ざあ

海面を見つめていた長女は、

寄せてひいていく波に近づく。

足元の波を見た。

波に乗って、ヘッドフォンが流れてくる。

長女はゆつくりと手を伸ばす。

ヘッドフォンを波間から引きずり出す。

コードがずるずると引つ張られてその先に、

スマートフォンのようなものが姿を現す。

袖で海水を拭う。

防水のケースに入っているのか、

長女は中身を取り出した。

弟のもの。

長女は海の彼方を見る。

地平線に半分、

太陽が隠れている。

濡れたヘッドフォンを耳にあて、

長女は手元で何かを操作した。

ぎ

ぎ

ぎぎぎ

機械の不具合のような雑音。

やがて波の音になって、

聞こえてくる。

ギイ

ギイ

船の音が聞こえる。

長女の耳には、たぶん。

弟の最後の言葉が聞こえている。

後を追うように、

とぎれとぎれ、繰り返す。

長女 見て見て。爪の先にサイレントスターが乗っかってる。

長女 何にも言わないから。

長女 集中しないと聞き逃す。

長女 どうして息を吸って吐いて吸って吐いているのか。

長女 夜眠って朝目が覚めるのか。

長女 耳を、澄ます。おねいちゃん、

長女 目を瞑ると星が見えるでしょう。

長女 毎晩、空を見上げて、星と、宇宙と、空と、

長女 ナンにも繋がらない。当たりまえだ。サイレントスターは、

長女 目の中、砂粒の中、水筒から落ちる水滴の中、吐く息の中、靴の裏底、睫の先、おにぎりの米粒にあった、

長女 僕は、バカじゃない。

長女 けど、透明巨人はバカだ。だからやっぱり僕も、

するりと、ヘッドフォンを外す。

聞こえてくるのは波の他には、

流星群のように流れていく砲弾。

キラリ。

海面に太陽が反射して、

長女は目を覆った。

長女 ……眩しい。

長い間、長女は目を覆った。  
カチコチ。

長い長い時間が過ぎて、  
太陽はすっかり海に沈む。  
どこかで午前0時の時計のベルが鳴っているだろう。

しばらく。

そのまま。

時間が止まったような、沈黙。

カチコチ。

ゆっくりと時間が流れ始める。

覆った手が

静かに、静かに顔から離れて、いく。

目の前に船。

老婆が2人、すでに乗っている。

老婆2 あとひとり乗れるよ、

長女 ……え。

老婆3 ピクニック行き。

老婆2 戦場海上境界ラインのど真ん中でね。

老婆3 ビールとおにぎり。

老婆たちは、妊婦と助産師が年老いたようにも見えるかもしれない。

老婆3 早くしなよ。

老婆2 始まったみたいだからねえ。

老婆3 海の上でも。

老婆2 地の果てまでもね。

老婆3 見えるかい。どこまでも、戦場境界ラインが続いている。

老婆2 あんた聞いたんだろ？

長女 え。

老婆2 サイレントスターの瞬きと、

老婆3 グレートリバーの流れをさあ。

老婆2 だからここにやってきたんだらうよ。

老婆3 ピクニック行き。

老婆2 あとひとり乗れるよ。

長女は手の中のヘッドフォンを見る。

波の音が聞こえる。

長女は老婆たちを見る。

首を横に大きく振って、拒否した。

老婆2 それもいい。

老婆3 それもあり。

老婆2 まだ望みはあるほうかい？

老婆3 選べるみたいだからね。

老婆2 生きていきましようよとは言わないけれどね。

老婆2人は、静かに船を出発させる。

ギイ



ギィギィあ

ギィ

ギィギィあ

ギィ

ギィギィあ

長女は大きく手を広げて、  
広がる海を抱きしめた。  
腕の中にはヘッドフォン。  
まるでお包みに包まれているように見える。  
長女は、歩き出す。

これは海を鏡代わりに、太陽を懐中電灯代わりにした未来の世界のひとつなのか。  
長女の現在そのものなのか。  
どちらでもかまわない。

長女は歩き続ける。

長女 少しだけ肌寒い春の夕暮れ、爪の先みたいな三日月、ポツポツ街灯が点灯しはじめる商店街を歩いて家に帰る。もう夕焼けは過ぎて早く帰らなきゃいけないけれどスカートの裾を握りしめてポテポテ歩くあの子の速さに合せて一步一步ゆっくり。電信柱が連なって、空を区切るように電線が向こうの方まで繋がってカラスが止まっていた。近道の横道を歩くとお風呂の匂い、ご飯の匂い、お茶碗の音、どこかの家から大きいヴォリュームでテレビの音、いつもの夕方、いつもの帰り道で、あの子、立ち止まった。引っ張っても何しても動かなくて、面倒臭くなって私ひとりで歩きだした。家はすぐそこ、でも10億光年先にある感じ。水槽の中みたいな空気、知ってるはずなのに、全然知らない惑星で迷子の気分。置き去りにされて聞こえるはずのあの子の泣き声が聞こえなくて、振り返る。爪の先の三日月を見あげて、ちっさいちっさい両手を空に、にぎにぎ、結んで開いている手、私、何かを、思い出しそうな感じがして、でも何か分からなくて、もどかしくて、サイレントスター……

長女 もう、

長女 憶えてない、

長女 けど。

長女 「パパとママに内緒で、サイレントスターのこと、話してくれない？ 私はもうね、ほとんど思い出せないから」

長女 私が、

長女 あの子に、生まれたばかりの弟に、

長女 言ったって、

長女 そのことさえ、もう、憶えてないけど。

長女は手の中のヘッドフォンを、

長女 見てやろうって。

自分の耳に、

長女 見続けてやろうって。

装着して、

長女 見えないけれど流れていく空気とか、虚しいけれど流れてくるニュースとか、乱暴に流れていくだけの時間とか、見つめ続けてやろうって。賛成も抵抗も出来ないなら、見るしかないから。おぞましいことも、全部。ジダイジダイ透明巨人の足跡を、

ヘッドフォンから流れるやけに明るい音楽を最大ボリュームにした。

長女は死ぬまで歩き続ける。